

山田耕筰 / 序曲 ニ長調

明るい気分を満たした《序曲ニ長調》は、日本初の管弦楽曲と言われる山田耕筰の小品である。ベルリン留学中の1912年、カール・ヴォルフ教授に古典的な作曲法の基礎を学んだ山田は、卒業制作となる交響曲「かちどきと平和」と管弦楽伴奏付きの合唱曲「秋の宴」に先立って、この曲を書いている。二管編成の、わずか3分半から4分程度の短い曲で、展開部のないソナタ形式になっている。初期ロマン派の趣のある楽想には、山田耕筰らしい歌心も感じられる。初演は1915年。この年に創設された日本初のオーケストラ、東京フィルハーモニー会管弦楽部の帝国劇場における第1回公開試演で、作曲家自身の指揮により演奏された。音階を駆け上るはつらつとした第1主題を中心に上行する音型が多く用いられ、時代の息吹を感じさせる。ニ長調で始まり、短いモチーフを掛け合う推移部を経て、イ長調でやわらかい表情をもつ第2主題が提示される。そのあと短調の楽想が挟まれ、ニ長調の属七和音から短調の響きがよぎったのち、ニ長調で第1主題が再現される。推移部は緊迫感のある短調の楽想を交えて進み、第2主題もニ長調で現れる。転調を重ねてクライマックスを形作り、力強く締めくくられる。開幕にふさわしい晴れやかな序曲である。

遠山 菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成

フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 2、
トランペット 2、ティンパニ、 弦五部 ※スコア上の表記